

～ がん看護専門看護師／皮膚・排泄ケア認定看護師の役割と活動 ～

がん看護に興味があり、看護師になりました。早いもので34年目となります。その間に、1997年に皮膚排泄ケア認定看護師、2015年にがん看護専門看護師の認定を受けました。

現在、わが国では18万人程度のオストメイト（人工肛門造設者）がいます。排泄ケアは、幼少の頃のトイレットトレーニングにより確立します。羞恥心を伴い汚いというイメージを多くの方が抱いており、そのため他者に相談できない内容であり孤独感を感じる方も少なくありません。

新人の頃、どんなストーマでも漏れない！ストーマケアの達人がいました。患者さんは、その先輩がケアするのを心待ちにしていました。漏れないケアを提供したいと進んだこの道ですが、漏れないケアを提供することも重要・・・でも、それよりも漏れる体験をしているその人に寄り添うことこそが看護のしごとだと感じています。難渋するストーマケアや創傷ケアをするときは「皮膚の声をきく」ということを大切にしています。

日本人が一生のうちにがんと診断される確率は2人に1人と言われています。それでもがん告知を受けた患者さんは「まさか自分が！」「なぜ自分が？」と思われる方は少なくないと思います。今までの自分とは違う絶望と恐怖、孤独、日常生活や将来設計が一変したと感じる方もいらっしゃいます。その思いに寄り添い、今までと変わらない存在であることを保障する。私たち医療者の中にある答えに導くのではなく、患者さんの中に答えはあり、その答えを導き出す力を信じて支援するよう心がけています。元気に回復される方がいる一方で、厳しい現実直面される方もいらっしゃいます。タイミングを逃さない！そのために準備を怠らないことが重要であると考えています。



緩和ケアチーム

◎ これからの自分の役割

尊敬する医師に言われ大切にしている言葉があります。「専門職を志す者は、誇りとともに大きな責任を有している。自分が歩いた茨の道を・・・自分も歩いたからと後世にも歩かせてはいけない。自分が歩いた道のりをその何十分の一かで歩める道しるべをつくりなさい」。看護するよりも、看護される側に近くなりました。自分が看護してほしいと思えるような看護師を育てていきたいと思っています。

地域がん診療連携拠点病院の承認が取り消されてから何年が過ぎたでしょうか・・・自分たちの時代に再承認が叶わなくとも、後世に夢と希望がもてるこれからを残せることを祈って。